全国大会に21年連続出場、都大路を駆け抜ける

一関学院高校 男子陸上競技部

●監督　千葉裕司　●主将　佐々木聖和　●部員　21人

第66回全国高校駅伝の県予選会は昨年10月21日、花巻市の花巻ハーフマラソンコース（7区間、42.195キロ）で行われ、一関学院高男子陸上部が他を寄せ付けない圧巻の走りで21年連続25回目の優勝を決めた。

同大会には、合同チーム2チームを含む男子32チームが出場。一関学院は、エースで主将の佐々木聖和（きよたか）さん（3年）を中心に、全員が快走でたすきをつないだ。同チームは、2時間7分56秒で優勝。2003年に同校が全国大会で8位入賞した2時間7分53秒に次ぐ好タイムだった。出場した7人は、全区間で区間賞を獲得。そのうち、4区間で区間新を記録した。

千葉裕司監督は「チームの強みは、けがをしないこと。誰かが故障で抜けることなく、万全の態勢で試合に臨めた。全国大会で、県記録を更新する自信はある」と力を込める。佐々木主将は「1区を29分台で走り、チームに勢いをつけたい。今年は、入賞を狙えるチームです」と自信をのぞかせた。

全国大会は12月20日。京都市の西京極総合運動公園陸上競技場をスタートする。

＊27年12月8日に取材

1_エースで主将の佐々木聖和さん／2_時に厳しく、時に優しく指導する千葉監督／3_「けがをしない」ことがチームの強み。毎日の練習に真剣に取り組む

春高バレーに4年連続10度目の出場、県王座を死守

一関修紅高校 男子バレーボール部

●監督　高橋昇禎　●主将　仲村将大　●部員　22人

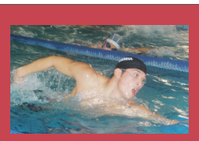
第68回全日本バレーボール高校選手権大会（春の高校バレー）県予選会の決勝は昨年10月26日、花巻市の市総合体育館で行われ、一関修紅男子バレーボール部が3対1で盛岡南に勝利し、4年連続10回目の全国切符をつかんだ。

昨年の高総体では、盛岡南高校に惜敗。インターハイ出場を逸した。主将の仲村将大（まさひろ）さん（2年）は「悔しさを晴らしたい」と春の高校バレーでの雪辱を誓った。選手らは一丸となって、走り込みや基礎練習を徹底。見事、王座に返り咲いた。

今年のチームの特徴を「粘り強さと決定力」と話す高橋昇禎（のりよし）監督。「全国大会までにさらに攻撃スピードを上げたい」と課題の克服に力を入れる。出場した春高バレーの最高成績は2回戦。仲村主将は「今年の目標は4強」と闘志を燃やす。

全国大会は、1月5日から東京体育館で開催。各都道府県の予選を勝ち抜いた男女各52の強豪校が出場する。初戦の相手は、沖縄県代表の西原高校。レシーブがよく、修紅とタイプが似たチームだ。まずは、初戦突破に全力を注ぐ。

1_同校のエース・福士徳紀選手の強烈なサーブ／2_速い攻撃はチームの持ち味の一つ／3_相手のスパイクをシャットアウト。夏の雪辱を果たした



Sugawara Kazuya

イーハトーブマスターズ水泳盛岡大会 マスターズ

新記録を樹立

菅原和也さん

26歳・一関市萩荘

菅原和也さんは、昨年11月22日に盛岡市で行われたイーハトーブマスターズ水泳盛岡大会の400㍍自由形25～29歳区分（短水路）で、4分1秒04秒のマスターズの日本新記録を樹立した。

菅原さんは3歳から水泳を始め、千厩中では400㍍個人メドレーで県を連覇。花巻東高校で200㍍バタフライ、山梨学院大で400㍍自由形の県記録をマークした。現在も短水路の自由形800㍍と1500㍍の県記録を保持している。

昨年1月、高校の恩師との再会をきっかけに水泳を再開。水泳チーム「一関シールズ」に所属し、市消防本部で消防士として勤める傍ら、スポーツアカデミー一関で練習に励んできた。菅原さんは「練習が少ない分、1回1回の練習を大切にしてきた。恩師、コーチ、一緒に練習している仲間や職場の皆さんに感謝しています」と話す。

国体の強化選手でもある菅原さん。「目標は4分を切ること。国体の出場権を獲得したい」と次を見据える。

1_仕事の休みの日にスポーツアカデミー一関で練習に励む／2_中高校生と一緒に練習に取り組む菅原さん。「人とのつながりを感じられることが、水泳の醍醐味」と教えてくれた

第15回全国障害者スポーツ大会水泳肢体不自由者男子1部 50メートル

バタフライで金メダル

立谷大祐さん

39歳・大東町摺沢

Tachiya Daisuke

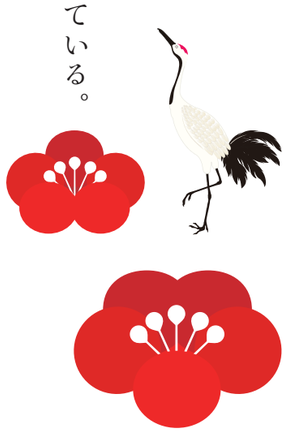
立谷大祐さんは、昨年10月に和歌山県で開かれた全国障害者スポーツ大会2015紀の国わかやま大会・水泳肢体不自由者男子1部の50㍍自由形で銀メダル、50㍍バタフライで金メダルに輝いた。

立谷さんは、元々バスケットボールをしていたスポーツマン。30歳のときに交通事故で大けがを負った。しかし、懸命にリハビリに取り組み、けがのリスクが少ない水中歩行を続ける中で「いっそのこと泳いでみよう」と水泳を始めた。以来、めきめきと上達。「一生、つえを突いて生活することになるといわれたが、水泳を始めて人生が変わった」と語る。

岩手県選手団の選手会長を務めたわかやま大会で、自由形・31秒42、バタフライ・40秒38のタイムで入賞。立谷さんは「今年は、岩手で希望郷いわて大会が開かれる。地元開催ということで、モチベーションも上がっている。ベストを尽くしたい」と話し、大会での飛躍を誓った。

1_仕事が終わり、藤沢町のB&G海洋センターで練習。週5回は練習するという／2_「水泳は、リハビリにも最適」と語る立谷さん。約2時間で約3000㍍を泳ぐという

アスリートたちにとって、奇跡は起こるものではなく起こすもの。

ひたむきに努力してきた軌跡は、必ず奇跡へとつながる。

2016年は国体イヤー。奇跡を目撃するチャンスは、目前に迫っている。